

亀岡湖伝説

中 川 和 哉

2 0 2 1 8 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

亀岡湖伝説

中川和哉

1. はじめに

京都盆地の東に隣接して亀岡市や南丹市の旧八木町の市街地を内包する亀岡盆地がある。亀岡盆地は旧国名では丹波国に含まれ、和銅6(713)年に丹後国と分国し、それ以後は現在の亀岡市域に丹波国分寺、国府などがおかれ、丹波地域の中心として栄えた。

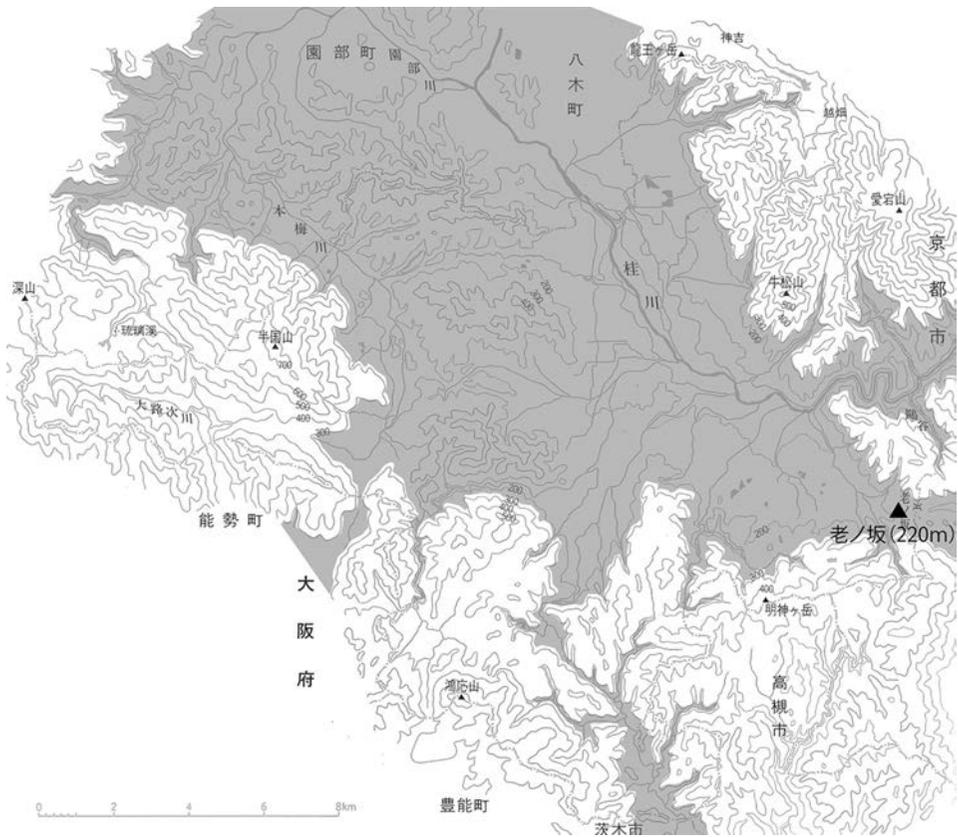
亀岡盆地は断層によって生じた断層角盆地で、盆地北東側には断層の傾斜面が山塊斜面として残されている。亀岡盆地の成り立ちについては、亀岡盆地がかつて湖であったという説が多くの人に信じられており、比較的専門性の高い書籍にもそのように書かれている。亀岡盆地内での発掘調査を実施するとそのような盆地が一体となるような湖の痕跡を認めることはできない。ではどうして湖であるという言説が流布したのかについては、2つの要因が考えられる。1つは亀岡市史における記述、もう1つは亀岡盆地における湖伝承の影響があり、その2つが一体となり時代性を無視した通説が成立していると考えられる。

2. 地質学的検討

『新修亀岡市史』によると亀岡盆地の北東側の山地にある牛松山から派生する尾根上の標高280m付近に小さな平坦地形があり、それが湖の水面変動で生じた湖岸段丘の痕跡であると解釈し、その標高で湖を復元すると亀岡盆地全域となる湖が復元できるとしている。その形成年代は、近畿地域で地盤運動が盛んであった時期に形成された沈降地帯である第二瀬戸内海があった時代と年代比定されている。第二瀬戸内海の時代は鮮新世から更新世中期である。

亀岡盆地の底は標高90~100m程度あるが、盆地には河川による段丘地形が発達しており、市史において高位段丘に位置付けられている地形が40~20万年前に形成されたとしていることからこの時期には湖が干上がって、川になっていることになる。これが亀岡盆地湖説の概要である。

琵琶湖に代表される大型の深い湖では、湖周辺部では急激な土砂の流入のため砂礫層が認められるが、湖岸から離れた部分では比較的環境変化の影響を受けることなく分厚い細粒の粘土堆積を確認することができ、その粘土層の間には他の地域からもたらされた火山



第1図 湖仮説による湖の範囲(新修亀岡市史を改変)

灰が多く含まれている。亀岡盆地内を見る限り分厚い20万年を遡るような湖底堆積物を確認することはできない。近畿農政局の実施したボーリング調査では、基盤岩の上に不整合で大阪層群の礫層や粘土層が堆積するとされており、亀岡湖に関する堆積物の記録はない。また、現在京都盆地から亀岡盆地に入る老ノ坂峠が標高220mであり隆起量の差がなければ矛盾が生じる。

それでは、標高280mにある平坦地はどのように考えられるであろうか？まず、地形からの解析であり、堆積物等の検討がなされておらず湖成段丘かどうかについては解釈の域を出ない。また、湖岸段丘は湖の水面変動に伴って形成されるものであるため盆地の周囲にその痕跡が確認できるはずであるが言及されていない。保津川下りで有名な亀岡盆地から唯一流出する桂川の狭隘部分付近の篠町王子には標高150～340mの丘陵状地形があり、開析された高位段丘とされており、露頭面の観察で段丘礫層が確認されている。堆積層もまた赤色化しており中位段丘以前の特徴を示している。

同じ高位段丘は、亀岡盆地西北部の湯の花地区の180m～200m地点で確認されていると

いう。湖説の肝である盆地東側斜面に認められる280m付近の平坦地は、逆断層の隆起側の斜面であることから高位段丘の名残とも解釈できるのではないだろうか。いずれにしても地質学的な証拠がないので、湖があったかどうかの確証はないことになる。

地質学の世界では、地層の年代を海洋底のピストンコアの分析で明らかになった地球規模の寒冷期と温暖期のサイクルをもとに設定されたMISステージ (Marine isotope stages) で表現することが一般的である。現在をMIS 1 (1.4万年前～現在) として古くなるほど数字が増え、奇数が温暖期、偶数が温暖期にあたる。低位段丘はMIS 4 (7.1～5.7万年前) に陸化しMIS 3 以後 (5.7万年前～) の堆積物が載る。亀岡でいう高位段丘がどの段階のものかは不明であるが、いわゆる中位段丘のMIS 6 以前 (～12.3万年前) と考えられることから、少なくとも、私たちの直接的な祖先である現代型新人が極東に現れるのが5万年を遡らないことから、私たちの祖先はたとえ湖があっても見ることはなかった。亀岡盆地の発達史については、現在多くのボーリング調査や断層調査が実施されていることから最新の資料で再考する必要がある。

3. 伝説としての湖

亀岡盆地で地質学な仮説以前から、亀岡盆地が湖であったという伝承が残されている。多くのものが口伝で、江戸時代をさかのぼるものはない。伝承はそれにちなんだ神社や地域によってその細部に違いがあるが、大きく分けると2つの伝承があり、それが合わさったものも存在している

1つは亀岡盆地の名前の由来に係る話である。亀岡盆地が湖だったころ赤い湖があり、その波立つ様子から赤色を指す「丹」の波が立つ国ということで丹波国と名付けられたものである。丹波国は、和銅6 (713) 年に分国され北部を丹後国とした。丹波の名前は『丹後風土記』逸文の中に丹後国丹波郡にある比治山山頂の真奈井という泉で天女が水浴びをしていたという羽衣伝説中にある。羽衣を隠され天に帰れなくなった天女が現京丹後市弥栄町にある奈具社にまつられた豊宇賀能売命とされている。延暦23 (804) 年に書かれた『止由気宮儀式帳』には雄略朝に丹波国比治の真奈井に座す等由気大神を伊勢神宮下宮に遷座させた記事がみられる。また、弥生時代後期から古墳時代の大型の墳墓も丹後地域に多く認められる。このように丹後分国以前は丹後地域が丹波の中心地であり、丹波の名前は現京丹後市名の地名であったことがわかる。亀岡盆地の丹波にちなむ伝承は、漢字から後付けされたと考えるのが妥当であろう。

もう1つの伝説は蹴裂伝説に分類されるもので、湖の水を抜いて肥沃な土地を作り出す内容であり甲府盆地の伝承にも見られる。伝説にはいくつかのバリエーションがあるが、



第2図 湖伝説に登場する神社と更新世以降の湖沼

中心人物は丹波一宮出雲神社の祭神である大国主命で、亀岡盆地を見渡せる山の上で複数の神様と相談して保津峡を開削して湖の水を抜いて国を作った。実働した神様として鎌山神社(亀岡市上矢田町)、請田神社(現桑田神社：亀岡市篠町)、餅籠神社(所在地不明)が共通して現れる。

鎌山神社は、保津峡開削時に使用した鎌の柄を山のように積んだことにちなんでいる。請田神社は明治期の式内社比定の中で桑田神社に改名している。また同名の神社は対岸の保津町にも所在する。亀岡盆地から唯一外部に水が流れ出す保津峡の入り口付近を江戸時代以前は浮田と呼んでおり、請田神社は浮田神社や浮田大明神とも呼ばれていた。浮田とは湿地帯にある田のことを意味している。伝説に登場する神社は亀岡盆地南東部に集中しており、亀岡市のハザードマップによると篠町付近は洪水によって災害を受けやすい低い地域であることから、浮田の名がついたと考えられ、それにちなみ神社名がついたのであろう。こうした低地では、河川の水位が下がっても自然堤防の外側では排水できず永らく水が残ることが多い。人々が力を合わせて、土で濁った水を抜き、田畑を元通りにした絶え間ない人々の苦労と過去を結び付けてこの伝承が成立したとは考えられないであろうか。

4. 湖は存在しなかったのか

現在は圃場整備によって再区画されている場所が多く、旧地形を読み取ることは困難になってきているが、かつては亀岡盆地にみられる沖積平野には条里地割が残されていた。圃場整備前の地図を見ると現在の桂川の左岸を中心に、条里が乱れた場所があり、大きな河川の痕跡が認められる。桂川は流路を大きく変えながら現在の位置に落ち着いたと考えられ、平野部に古川と呼ばれる痕跡の小河川や淵、河原などの地名を見つけることができる。こうした低地部には後背湿地や三日月湖が残されていたことは想像に難くない。

発掘調査ではこうした湖の堆積物と考えられる地層を確認した遺跡に、亀岡市案察使遺跡、同三日市遺跡がある。

亀岡市案察使遺跡で発見した湖は、低位段丘の段丘崖の下に位置しているためMIS 1の段階に形成されたものである。堆積層中に隠岐鬱陵火山灰を検出した。段丘崖を河川が攻撃していたところに近い年代と考えられることから、当時の川が段丘崖から離れて残された三日月湖の可能性がある。堆積層は2m以上あり、荒い洪水性の堆積物を含まないためある程度の深さと規模をもっていたと考えられる。堆積物の厚さが厚いことから長期間水があったものと考えられるが、崖錐性の堆積物を削って形成された段丘崖からは多くの水が現在も供給されており陸化が遅かったものと想定される。

三日市遺跡では、20cmを超す始良丹沢火山灰(AT)と上のホーキ火山灰を検出しており、多くの植物遺体を含む複数の層位を確認しており、湖の最も古い年代値が30,156cal.yr.BPである。年代はMIS 3の終わりからMIS 2の時期にあたり、寒冷化が進んでいく過渡期にあたる。湖が陸化した時期は不明であるが、トレンチの一部で湖成堆積物の上に、盆地を作った段丘崖斜面起源の崖錐性の荒い堆積物がおっていることが判る。この崖錐性の堆積物のある山裾部分では、縄文時代に人類痕跡があることから、MIS 1の時期の初期の温暖期の降水量の多くなった時期に活発な斜面崩積物の堆積があり縄文時代のどこかで安定したことがうかがえる。この一連の斜面崩積物のうち末端の細粒なものがこの湖を陸化したものと想定出来る。同時期の石器が三日市遺跡で発見されていることから、当時の旧石器人はこの湖を見ていたものと考えられる。

5. まとめ

亀岡の湖伝説については、亀岡盆地全体を想定する証拠に具体的なものはなく仮説の域を出ないことが判った。また、発掘調査の結果複数時期の湖が存在していることも明らかになってきている。伝説を否定するのも夢のない話であるが、亀岡盆地の人々が洪水にあり、湖化した田畑の水を流し復旧したことや、湿地を切り開き新田を作った苦勞が自分た

ちの氏神で国生み神話を持つ大国主の仕事に寄せて作り出されたもので、土地に生き、川と戦った人々の苦難の記録と考えられないであろうか。

(なかがわ・かずや=当調査研究センター調査課課長補佐兼第4係長)

参考文献

亀岡市史編さん委員会編 1995『新修亀岡市史』本文編第1巻

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005「案察使遺跡第5・6次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第119冊 pp.1-18

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2016「平成25～27年度主要地方道路亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡発掘調査報告書」『京都府遺跡調査報告書』第178冊 pp.209-350

京都新聞社編 1977「丹波の国づくり」『京都丹後・丹波の伝説』 pp.31-32

京都府 2003『三峠・京都西山断層帯に関する調査成果報告書』活断層調査成果報告書

京都府活断層調査委員会 2005「亀岡断層帯の第四紀断層運動と地下構造」『活断層研究』巻25号

京都府教育会南桑田郡部会発行 1924『南桑田郡誌』(1984復刻版参照)

下中邦彦編 1981『京都府の地名』日本歴史地名大系第二六巻 平凡社

吉田史郎 1992「瀬戸内区の発達史—第一・第二瀬戸内海形成期を中心に—」『地質調査所月報』第43巻第1/2号 pp.43-67

Gamble.C.1995『Timewalkers』Penguinbooks. 年代値については補正值を含む年代に変更。